

白鷺の住めるまちづくり



ここに私たちは
白鷺を自然のシンボルとしてとらえ、
「人と自然との共生」を基本理念とした、
「白鷺の住めるまちづくり」を提唱していきます。



松山白鷺ライオンズクラブ

共生の時代に私たちは生きています。

ここで、私達のまちづくりのための基本となるキーワード、「共生」という概念について、再認識しておきます。「共生」とはもとも、共棲と同義の生物学の用語ですが、その意味は、「別種の生物が一所に棲息し、互いに利益を得て共同生活を営むこと」です。言い換えれば、「生かされて生きる」ことだともいえます。

「共生の思想」とは、今世界中で起きている思想上の大変革としてとらえられています。閉鎖的な集団社会意識や貿易上の保護主義からの脱却は、世界共通の戦略であり願いでもあります。かつてそうであったように外からの影響を受けず自らの閉鎖社会を守ってさえいればよい時代ではなくなった今、それは同時に利害の衝突、個性の衝突、文化の衝突の時代に突入したことも意味します。衝突といってもこれはもちろん、衝突した相手をたたくて解決できるものではありません。お互いの個性や文化を認めつつ競争し、対立し、批判しつつ協力するという「共生の時代」に私達は生きています。

必ずしも自らの主張や文化的価値基準が他と一致しなかったり、異なる場合がありますが、仮に異なった場合も、一方が他方を屈服させるのではなく、対立したまま共通点を探る方法があってもよいはずですが。そうするためには、まず相手を理解しようとする意思があるかないかが重要な分かれ目になってくるのです。

(共生の思想 黒川紀章著より)

対立していても、両者に理解しようとする意思さえあれば、協力しあうことは可能になります。ライオンズの誓いにある「友愛と相互理解の精神を養い・・・」は、まさに「共生の思想」なのです。

また、「共生」を自然と人間の関係として見るならば、人間が自然をただ単に一方的に支配し制御するというような関係ではなく、人間も自然の一部として大きな秩序の中にあることを意識しながら、より調和的な関係を目指していくものといえるはずですが。

白鷺の住めるまちづくりの基本理念について

■共生の土壌は松山に充分あるから。

真の豊かさとは、物的な充足ではなく、自己を取りまく環境、すなわち人間関係、自然、伝統文化などと自己との間に豊かな相互交流がなされ、大きな調和の中で自己が生き生きと生かされていることを実感することによって感じるのではないのでしょうか。

松山は、瀬戸内海に面した温和な気候と山河の豊かな自然に恵まれ、数々の神話と伝統を持つ日本最古の道後温泉をはじめ、名城松山城、名高い寺、古く由緒のある寺など、多くの文化遺産が残されています。さらに、俳聖正岡子規をはじめとする多くの文化人を輩出している松山は、全国有数の俳都としての情緒を感じさせてくれます。

また、松山は来たりて移り行く「お遍路さん」の中継基地としての性格を持っており、古くから外界から入る文化・情報・技術等を受け入れる社会性が強く、外来者を「お接待」するならわしも古くから市民の中にとけこんでいました。

昨今の松山は、各地からの人口を吸収し、県外出身者の来住定着を通して、文化的に「るつぼ」の状態になりつつあります。それを、広量の眼差しによって包み込む社会性が松山には存在します。異なった考え方のもの同士が共存し、少数意見を大切にする風土、つまり「共生」への土壌が松山にはあります。

今日、人類に課せられた課題の中でも「環境問題」は最重要テーマの一つです。オゾンホールや温暖化など「地球規模の環境問題」に代表される今日的な環境問題への対応策は、つきつめれば、私たち一人一人の日々の生活スタイルを自然環境のキャパシティの範囲内に納めるよう“地球に優しい生活”を心がけ、努力することに尽きると言えます。

人間にとって、「自然との共生」は、生きていく上での基本なのです。

■基本理念は「人と自然との共生」

松山をシンボライズさせる伝説の白鷺

道後温泉の白鷺は、まるで守り神のように振鷺閣の上で羽ばたいています。松山をイメージするにふさわしいこの白鷺を自然のシンボルとしてとらえ、ここに私たち松山白鷺ライオンズクラブは、「人と自然との共生」を基本理念として、「白鷺の住めるまちづくり」を提唱していきます。

野鳥やホタル、秋の虫などを大切にする環境作りは、人間にとっても住みよいところになるのは当然です。しかしながら、私たちがまず主張したいのは、単なる環境保護を訴えているのではなく、あくまでも「人」が存在することを前提とする、ということです。

道後伝説・・・

道後温泉は、開創以来およそ3,000年、日本最古の歴史を持つといわれています。3,000年前、つまり縄文時代の頃から、ここ、松山・道後に温泉があったとされているのですが、その頃の記録があるはずもなく、開創についての歴史は定かではありません。

しかし、私たちの想像力を膨らませてくれる数々の伝説があります。そのひとつ、有名な「白鷺伝説」をご紹介します。

鷺石と鷺の湯

むかし、足にけがをした鷺が一羽、どこからともなく飛んできてな。たまり水に足を浸しては、一つの石にとまって乾かし、また浸しては乾かして数日後には良うなつてな、また、どこへともなく飛んで行ったんじやそうな。

一人の老人がそれを見よつて、どうもおかしいと思つて、そのたまり水を調べてみたら湯気の立つとる温泉じやったんで、掘り起こしたんじやと。その温泉が、道後温泉よ。

鷺がとまつとつた石を鷺石といつて、その石は伊予鉄道道後駅前の「放生園」に今もあら。



■自然との共生を求めて。

私たちは、自然が美しいまちに住んでみたい。

■「緑」「自然」の大きな役割

わが国は、高度経済成長期を経て、物質的な豊かさは満たされてきました。が一方で、精神的な豊かさや人間性の回復の必要性も強く叫ばれるようになってきています。特に「緑」や「自然」の必要性については、身近な環境の改変を目のあたりにして、国民や県民の間でも強く意識されています。総理府の行った世論調査でも、「住んでみたいまち」として、「便利なまち」や「落ち着いたまち」よりも「自然が美しいまち」が過半数を占めて第一位となっています。このように、時代の変遷とともに機能性や利便性よりも緑や自然が強く求められるようになってきましたが、さらに近年においては、見た目の緑よりも、多くの生き物が住んでいる多様な緑へと、求められる緑の「質」が変化してきています。「緑」には、人々の心に安らぎや潤いを与えるアメニティとしての緑だけでなく、多様な生き物の住むエコロジカルな緑という新しい視点が加わりつつあると言えます。

さらに地球環境問題の重要性が認識されるに伴って、緑は住環境にとっての一種の安全装置としての役割も位置付けられるようになってきています。コンクリートやアスファルトなどの人工物で覆われるほど、都市の平均気温が高くなり、ヒートアイランド現象（大量の人工熱や大気汚染物質が放出される都市では、平均気温が周辺より高くなり、等温線で表すと島の形になる）を起こすことが指摘されていますが、緑には、このヒートアイランド現象を緩和する働きのあることが知られるようになってきています。



■緑が創るもの、育てるもの

山、川、季節を知らせる花、鳥・・・身近な自然環境は、子供たちの成長にとっても、欠かせないものであるという認識も近年強くなってきています。

このように、身近な緑が都市における人間の健全な成長とエコロジカルな装置として重要不可欠であることが認識されるにつれて、緑は今までのような保全の対象としてだけでなく、創造の対象としても考えられるようになってきています。フランクフルトやデュッセルドルフの都市公園を例にあげれば、すぐ近くに地下鉄やハイウェイがあるにもかかわらず、市民たちが自然と共生している姿がそこにあります。実に感動的なこの風景、「自然と人間の共生」の場を、単に憧れとしてとらえるのではなく、私達自身で創り、育てなくてはならないのです。

■豊かな緑と水の自然環境に向けて。

これまでは自然環境の保全と地域の開発は両立しがたいものとしてとらえる傾向がありました。が、地域の開発と自然環境の調和こそが、今後の施策展開にあたっての重要な課題だと考えられます。

■地球環境問題への現状と対応

近年、オゾン層の破壊、地球の温暖化、酸性雨などの地球環境問題が大きく取り上げられています。大量生産、大量消費の社会が生み出す資源の無駄使いとゴミ処理問題、アスファルトなどの人工物で被覆された都市のヒートアイランド現象、自然生態系の循環変化による土壌減少など、私たちは、文明の陰で知らず知らずのうちに、地域の生態系並びに地球の生態系を少しずつつわらせているという事実も認識しなくてはなりません。

地球環境問題というものは、規模が規模だけに、国際的な話し合いによって解決すべきものと考えがちですが、いずれの問題も最終的には各国各地域で対応を図るべき課題です。となると、省資源、省エネルギー、リサイクルシステムの完備した社会、あるいはまちづくりが基本となって、対応していかなければなりません。

パリのブローニュの森(846ha)やニューヨークのセントラルパーク(340ha)のように、都市の中に大きく残された自然が、その都市の顔として人々に親しまれ、いつまでも愛され続けている例は数多くあげられます。身近な緑と水辺がネットワークした都市は、これらの緑や水辺を伝えて、郊外のきれいで冷たい空気が都市の中に流れ込むばかりでなく、有機物の循環が確保され、“動物・植物の育つ街”となります。

また、身近な自然は、都市住民の憩いの場所として、都市住民のストレスを解消し、子供たちから老人まで幅広い年齢層が集える場所を提供することができます。さらに、身近に自然があることから、わざわざ遠くの自然に出掛けるための時間とエネルギーの節約を可能にしてくれるのです。



白鷺の住め

心

まちづくりでは何と言っても一番大切なのは心なのである。自然を愛する心、そしてまちを愛する心を一人でも多くの市民に持ってもらい、自分にできることからやってもらう。為まず自らが、範を示さなければならない。我々は、知性を高め、友愛と相互理解の精神を養い、平和と自由を守り、社会奉仕に精進する。

水

松山市は、都市の発である。石手川ダム水不足は非常に深刻な松山市民は水の大切な水を守っていく為の

【基本計画】

社会教育・家庭教育

啓蒙運動

コミュニティの形成

リサイクル社会の構築

【実施計画】

*環境カルテづくり

*モラルの高揚

*ゴミ問題

*水の大切さ

*リサイクル

*省資源

*省エネルギー

*緑の羽根募金活動

*思いやり運動

*親子のふれあう公園づくり

*自然環境に取り組んでいる個人・団体への支援

*資源ゴミ等の有効利用

*フリーマーケットの実施

*道路・公園などにゴミ箱の寄贈

*愛称運動（白鷺通り）

*中水道の提唱



●フリーマーケット

家で眠っている物は、一緒に捨てればゴミ、分ければ資源なのです。ゴミにしない、ゴミを出さない、ものを大切にするという心がけが大切なのですが、それを体感できるフリーマーケットはリサイクル社会の構築に向けて非常に有効な手段であると考えられます。

●白鷺通り

ヒートアイランド現象を起こしている都市にとって、郊外のきれいで冷たい空気が、緑や水辺を伝って流れ込むのと同様に、白鷺もそれを伝って入ってきています。市の中心部に入ってくる白鷺の道は石手川水系ですが、石手川の北側に添って、ついている道路は、まるで白鷺の道であるかのような感じさえます。鷺というのは鳥の路と書きますが、あの道を白鷺通りと呼ぶのはどうでしょうか。

●サギソウ

サギソウはラン科の多そっくりの花を咲かせまる北宇和郡津島町御槇ののピンチと聞いて、サギの送り主は、なんと松山です。何か今までに聞いたませんか。

【運動展開】



との共生

まちづくり

●私たちは具体的に何をどう進めていけばいいのか。

主に水の供給が追いつかないのが現状(白鷺湖)の貯水量も限界にきていて、問題である。しかしそれだからこそ、十分に認識しているのだ。その大切行動を続けていきたい。

緑

松山市の都市公園は全国同規模の都市と比較しても数はかなり少なく、面積も多い方ではない。松山市内の目に見える緑は、特に中心部では城山と総合公園とそして河川の緑なのである。私達は数少ない今ある緑を大切にしつつ、エコロジカルな緑の創造を目指していきたい。

水質汚染防止

ラブリバー運動

観光開発

緑化運動

野鳥のサンクチュアリー

*白鷺のコロニーづくり

*おりのない動物園

*野鳥の勉強会

*植樹運動

*市民の森づくり O・P・M運動

(OWN A PIECE OF MATUYAMA)

*サギソウの公園づくり

*自然ふれあい教室

*水辺巡り観光コースの模索

(山から海まで水の流れるままに自然の中で)

*アメニティマップづくり

*石手川水辺にアメニティスペースの整備

*環境を考えるシンポジウム

*We Love 石手川

*各家庭での排水浄化の勧め

*ホテルの里づくり

*魚の放流

●O・P・M運動 (OWN A PIECE OF MATUYAMA)

自然環境保護を目的に、アメリカで行われているイベントに「O・P・A」(OWN A PIECE OF AMERICA)というのがあります。これは、全米50州に約1200坪ずつ購入された土地を1インチ×1インチ×50州単位でセットして、世界の人々に持ってもらうという企画です。こういう運動が松山でもできないでしょうか。

●白鷺のコロニー (居住地)

野鳥はエサ場と寝ぐらとの両方がなければ生息できません。緑が少なくなるにつれて、追われた野鳥が付近の人家にファン公害をおこしているのも現実です。コロニーづくりにはそのへんも考慮して、近くに人家のないような場所を設定することが非常に大切です。とべ動物園の周辺にあるアオサギのコロニーを見てみると雄大で感動的です。

生草木で、夏ごろ空を飛ぶ白サギ。県の天然記念物に指定されている地池公園のサギソウ自生地が絶滅の苗が送られています。その苗住の愛好家が松山で育てた苗のいた話と場所が逆なような気がし



「豊かな創造力を育てる社会の実現」と 「緑と水と心のネットワーク形成」。

市民の生活環境及び生活の向上のための条件整備は、これからのまちづくりにとって重要なテーマだと言えます。つまり都市は、市民の自己表現の場、文化創造の空間でなければなりません。この観点から、松山の各地域を見た場合、重信川及び石手川は、このような需要に応えうる空間だということがうかがえます。この地域は、市内でも緑が多く、水辺の接近も可能であり、周辺整備を行うことにより快適な空間が広範囲に確保できるからです。重信川・石手川地域を基礎にして、社会教育と自然環境の2点から松山を考えてみましょう。

— 1、ゆたかな創造力を育てる社会の実現。 —

これからの社会動向として、高齢化社会の進行と労働環境の整備、学校の週5日制などによって、余暇時間の増大が考えられます。そこで、人間本来の生き方、思いやりの意識、生き甲斐について見つめなおし、自ら学ぶ姿勢が求められるようになるでしょう。また、個々のオリジナリティや表現力、創造力を豊かにして感性を磨き、自我の形成に努め、地域社会の中で連帯意識を養う必要があります。同時に、それを実現するに当たっての社会教育を育成するシステムを確立することが、必要不可欠なものだと言えます。

— 2、緑と水と心のネットワーク形成。 —

重信川と石手川の河川敷・水辺空間と、そこで憩う市民とを密接に結びつけ、快適な空間を創り出したいと考えます。そこで、石手川水系を考察してみると、河川環境の整備、水質浄化、効率的な水利用（節水型都市）など、環境にやさしい都市整備を進めながら、バランスの取れた自然環境の保全に務めることが必要となります。そして、この地域に快適で市民の心潤う空間を設けることにより、「緑と水と心ふれあう」豊かな社会環境が確保できると考えます。

互いに関連性を持ったこの2つの項目の実現によって、豊かな自然環境が創り出され、人と自然の調和のとれた快適な空間が確保されます。そして、本来都市中心部では味わうことのできないような清涼感と心のうるおいを市民が享受することになるでしょう。

■あなたのできる白鷺の住めるまちづくり

■市民のできる、自分のためのまちづくり～ヒューマンネットワークの重要性～

瀬戸内海に面した温暖な気候、平野と河川と丘陵とを保有する、きわめて恵まれた地理的条件を備え、豊かな自然環境の中に位置する松山市。この恵まれた環境・条件を活かし、人々が営み暮らす場、様々な交流がなされる場、新たな歴史や伝統がつけられる場、安らぎや潤い、にぎわいと活力のある場、そうした街で住み、学び、育ち、働く人々の手によって、快適な市民生活を営む事のできる空間を実現させるためには、自らが住み、暮らす環境や街に関心をもつと同時に、自らの手で築いていこうとする気持が必要で。

まちづくりをする事は、人の為にだけするのではなく、それを享受するのは「自分」です。子供の成長の為にはよい環境が必要であるし、企業の発展の為にもまちの発展は必要なのです。

「行政」だけでまちづくりはできないという事は、すでに認識されていることと思います。特に「環境問題」においては、住民の考え方。協力の仕方によって、その取り組み方は全然違ったものになります。「まち」は、そこに住む市民のレベル以上には決してならないのです。

まちづくりには「官」「産」「学」「住」の4者がそれぞれ役割分担をしていく中で、「協力」と一人一人の「力」が必要なのです。

「全国まちづくり事例」の中には、仮にたった一人からはじまった運動でも賛同者が少しずつ増えていって、大いなるうねりを描き、人と人との輪がどんどん広がっていき、大きな成果・確かな進歩を遂げている成功例がたくさんあります。私なんか、私ぐらい・・・の意識は捨て、「私から」の意識を持ってください。住民一人一人の力の大きさは、私たちが「白鷺の住めるまちづくり」を推進するときに忘れてはならないことなのです。

■賛成と参加は違います。

市民は市民であると同時に、まちの頭脳でもあります。まちはそこに住む人間の生活の場であるだけでなく、便宜を享受する場でもあります。だれもが、暮らしやすいまちであってほしいと願い、より良いまちになればいいと思っています。私たちは共に運動をすることによって住民に「自分たちの住む、我がまちに対して自分は一体何ができるのか」という意識を持ってもらいたいと思っています。自然を、環境を大切にしようという運動はほぼ100%に近い賛同が得られると思います。しかし、賛成はしてくれても、参加してもらおうのはなかなか難しいのです。自分の事としてとらえてもらうことが、大変むづかしいということを私たち自身も認識して、運動を進めていかななくてはなりません。

私たちが行動を起こす時には、自らがまず「やる気」を持ち、十分に工夫した計画を練り、準備をしなければなりません。そして参加してくれた人々には、「次回も是非やろう」と思ってもらわなければなりません。

地域を愛し、自然を愛する人の輪が広がり、うねりが大きくなればなるほど、確実にまちはよくなっていくのですから。

■自然環境の保全と整備

恵まれた自然環境を持つ松山市においても平野部における緑は宅地化の進行、あるいは小河川や水路は、生活上の要請等に添って、自然の状態が変わりつつあります。また、瀬戸内海の汚染も進行しています。このような現状をふまえながら、自然環境を保全し、回復させ、さらに創出していく努力を持続することが必要です。

まちづくりの
視点

自然環境

●松山市の位置

松山市は愛媛県のほぼ中央、松山平野の北東部に位置し、市役所は東経132度50分にある。東端は水ヶ峠の石手川を蒼社川の分水嶺で越智郡玉川町の境、西端は釣島、北端は北三方ヶ森で北条市と玉川町に接しており、また南端は三坂峠で瀬戸内と土佐湾の分水嶺上浮穴郡久万町を境にしている。市域は松山平野の大半と山麓、興居島を含み、また瀬戸内海に面しており、変化に富む自然環境をもっている。

(面積289.37km²)

●気候

松山市の気象台の位置は、東経132度47分、海拔32.3mで、東京に比べると7度の差があり、夜明け日没が28分遅くなる。年平均気温は15.6℃で、高松の15.2℃より高く、高知の16.3℃より低い。年降水量の平均は1,337mmで、1月が平均52mm、6月が平均228mmの夏雨型となっている。これまでの最多年は1943年の2,040mm、最少年は1978年の759.5mmで著しい差がある。高知、徳島に比べて台風の通過が少ないのも特徴で、積雪は少なく、初雪の平均は12月21日、最早は1938年の11月12日、終雪の平均は3月7日、最晩は1902年の4月11日と記録されている。

松山市は、瀬戸内海に面した温暖な気候、平野と河川と丘陵とを同時に保有するきわめて恵まれた自然環境の中に位置し、豊かな自然を擁する地理的条件を備えている。

歴史的特性

松山平野が古くから拓け、人口密度の高かったことは、近世紀に城下町として発達する以前にも河野氏の古城があったことから知られています。生産性の高い農業の周辺には、かなり古くから砥部焼きとか伊予かすりのような伝統産業が興っており、おしなべて経済水準は高かったと思われる。このような豊かさに基礎づけられた「ゆとり」を念頭においてこそ、茶の湯、俳句などの趣味文化が盛んであったことが理解できます。

来たりて移り行く「お遍路さん」を松山の人々が歓迎する習慣が定着したのは、果たして人々の心の温かさだけによるものなのでしょうか。人々の親切心もあったのは確かではありますが、旅ゆく人というのは、松山人すなわち定着農耕民にとっては、文化の伝播者であったし、また、情報、技術の提供者であったからに違いありません。工業や医薬の技法を授け、作物の新品種や栽培方法を伝えて、水利を指導して、土地をいやし、仏法を説いて心をいやすなどの功德が期待されたからこそ、松山の人々は「お接待」にいそしんだのでしょ

●聖徳太子と湯の岡の碑文

法興6年(596年)10月、温泉を訪れた聖徳太子は、霊妙な温泉に深い感動をおぼえ、碑文一首をつくりました。その碑文によると、当時の道後温泉郷は、尊く不思議なその温泉を囲んで椿が互いに枝を交わして生い茂り、その姿は、あまたのどん帳を垂れ、きぬがさ(蓋)をかざしたように見え、朝なきの鳥がさえずる中、椿の花は照り合いその実はたわわに温泉にたれて、あたかも天寿国にある思いがすると讃えています。

ど
れ
だ
け
知
っ
て
い
ま
す
か
?
あ
な
た
の
松
山

身近な一步はあなたの一步です。

松山市政としても、自然環境の保全と整備につとめ、いろいろな施策を進めていますが、自然環境の保全に於いては、様々な面で行政機関だけではとても間に合わない点が出てきています。

そこで、私たち市民一人一人の協力、また各種団体等の奉仕活動の必然性が生まれて来るのです。各家庭では何が出来なのか、また団体としてはどうなのか。私達松山白鷺ライオンズクラブは、現在から未来への展望のもとに、方針を定め、白鷺の住めるまちづくりを環境問題への取組みの身近な第一歩として進めることにしたのです。



なぜ、今、「白鷺の住めるまちづくり」か。

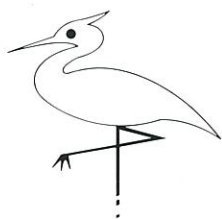
「我々は知性を高め、友愛と相互理解の精神を養い、平和と自由を守り、社会奉仕に精進する。」

このライオンズの誓いを、私達は例会の度に、確認しています。が、単にセレモニーとしてこの誓いを提唱するだけでなく、今一度、会員ひとりひとりが、集まっている事を認識し、「なぜ自らがライオンズクラブの一員であるか」を考えてみる必要があります。

私達の住んでいる地域を良くしていく為に私達は、何ができるのでしょうか、今私達のまわりに、さまざまな問題が数多く起こっています。そのたくさんの問題に対して、今の私達の力ではその全てに対応する事はできません。限られた時間と予算を効率的に活用するためには、私達の運動の方向性を明確にして、意識とエネルギーを集中する必要があると思われれます。そのためにも、まず、活力ある地域社会作りのための行動目標であるビジョンを策定しました。ライオンズクラブの特性でもある「単年度制」は、組織を活性化させるためには非常によい制度ではありますが、反面、時の委員長によって方針があれこれ変わる場合もあるので、ともすれば、外に向いての運動には関係各位に迷惑をかけたり、信用を無くすといった不本意な結果にもなりかねません。社会的団体で社会に責任を持つ団体であるならば、順序だった系統性のある活動を続けていかなくてはなりません。そのためにも、団体としてのビジョンを、そして、目的と手段を明確にする必要があるのです。

まちづくりは誰が誰の為にやるのでしょうか。それは自分が自分の為にやるのです。自分のため→自分の企業のため→子や孫のため→地域のため、ひいては自分の為にやった小さな事が地球のためになるのかもしれませんが、例えば明治神宮という大きな森をもつ地域があります。これは原生林に近いような巨大な森ですが、実は80年前に作られた、まったく人工的な植樹による森だということを、私たちは再認識する必要があります。小さな一歩でも今スタートすれば、100年後には原生林もつくる事ができるのです。

ビジョン策定にあたっては、[トレンド] [松山の特性] [問題点] [松山のイメージ] [夢] [松山白鷺ライオンズクラブの特色]などを念頭に置き、調査活動を通じ各方面の方々の意見や文献を参考にさせていただきました。この私達のビジョン「白鷺の住めるまちづくり」がメンバーの「わがまちへの愛」と「情熱」によって、松山白鷺ライオンズクラブの指針となり、その輪が大きくなっていくことを願っています。これをまとめるにあたっていろいろと貴重なご意見、御助言を頂いた数多くの関係各位に心から感謝申し上げます。どうもありがとうございます。



松山白鷺ライオンズクラブ

住所 〒790 松山市一番町1丁目13-5国際ホテル別館2F

TEL0899-32-3205 FAX 0899-32-3206